

ICTイノベーションで地球的課題の解決を

最近、講演の最初に説明しているテーマがある。文化人類学者である梅棹忠夫先生は、昭和37年から「情報産業論」などを書かれた。「情報産業の時代＝精神産業の時代」とされ、生命の発生過程になぞらえて、(1) 内胚葉＝消化器系＝農業、(2) 中胚葉＝筋肉・骨格系＝工業、(3) 外胚葉＝脳神経・感覚諸器官＝情報産業とされている。新しい時代において、情報は人間の装置、制度、組織に一層根本的な変革をもたらすであろう、人間はそのときこそ、根本的な価値の大転換を経験することになるであろう、さらに情報産業ははるかに広大な文明史的傾向をさすべきであって、単なる機械工業の一分野に限定されるべきではなかろう、と指摘されている。今から実に50年も前にである。我々は今、ICT (Information and Communication Technology) 革命の真ただ中(入り口かも知れないが)にいる。再度、梅棹先生のお言葉を噛み締める必要があると思う。

世界の総人口は2050年までに90億人を突破し、そのうち約7割が都市部に集中、2017年には新興国・途上国が世界のGDP (Gross Domestic Product) の4割以上を占めるなどグローバルな環境は激変するだろう。地球温暖化、エネルギー、食料、水不足、防災など地球的課題の解決は待ったなしの状況である。また、我が国もさまざまな困難な課題に直面している。人類は幸い技術革新の著しいICTという手段を手に入れることができた。ICTは、(1) 新たな付加価値の創造と、(2) 医療、教育、防災、資源問題などさまざまな社会課題の解決に貢献できる。すなわち、ICTを戦略的に活用することにより、「地球的課題」と「我が国の課題」を共に革新的に解決できる可能性があるのだ。

一例を挙げれば、我が国は、諸外国に先駆けて人類が初めて直面する超高齢社会に突入する。労働人口減少、医療費増大、コミュニティの希薄化などさまざまな課題に直面するが、時間と距離を超越するICTのパワーを活用すれば、これらの課題解決は可能であり、世界に「スマートプラチナ社会」のモデルを提示することが我が国の責務であろう。

我々は、インターネットの出現により、人類共通のグローバル空間(サイバー空間)を初めて手に入れることができた。世界各国のさまざまな課題を、各国がお互いに知恵を出し合うことにより解決できる共通基盤ができたとも言える。情報セキュリティ、プライバシーなど解決すべき課題もあるが、対立概念として捉えるのではなく、情報の自由な流通の確保を最も重要な基本原則として、さまざまな課題にイノベティブにチャレンジすべきである。

今や、抽象的な議論ではなく、この課題を解決するためにはICTをこう使えば良いという実践的アプローチとスピードが求められている。「グローバルな知恵比べの時代」と言えるだろう。

2020年の東京オリンピック開催が決まった。産官学が連携することにより、イノベーションを創出するとともに、グローバルな視点を常に念頭に置き、ICTの革新的活用による地球的課題の解決に貢献し、世界からリスペクトされる国になることができればと思う。



阪本 泰男

総務省

情報通信国際戦略局長

1980年郵政省入省、2001年7月総務省総合通信基盤局電気通信事業部データ通信課長、2003年1月内閣官房副長官補付内閣参事官、2005年8月総務省情報通信政策局総合政策課長、2007年8月総務省大臣官房企画課長、2008年7月総務省大臣官房審議官(情報流通行政局担当)、2009年7月内閣官房情報セキュリティセンター副センター長、2011年7月総務省大臣官房審議官(情報流通行政局担当)、2012年9月総務省政策統括官(情報通信担当)、2013年6月より現職。